

幸せな冬

灯利

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

栗那ちゃんと昴晴くんが冬の寒空の下イチャラブするだけ。Pixivに上げてあ
るものと同じものです。

目次

幸せな冬、寒空の下。

—
1

幸せな冬、寒空の下。

栞那と出会って、気がつけばもうどれほどになるだろうか。

死神として栞那と出会って、喫茶ステラで働いて、栞那と付き合い始めて。

気がつけば、栞那と同棲を始めてから幾度となく過ごした冬がまた来ていた。

あの事件以来、人間となった栞那の肉体は、死神時代に忘れられていた時間を取り戻すかのように目覚ましく成長を遂げていた。

若々しく、可愛さに溢れていたカフェ開店時のあの頃に比べると、落ち着いた大人の魅力を身にまとい、前にも増して栞那の笑顔に花が咲くようになった。

同棲生活も円満そのもので、時折小さな喧嘩はするもののそれ以外に特に問題は起きてはいない。最初の頃のお互いにしどろもどろしていた雰囲気は今ではとても懐かしく感じてしまう程にだ。もうすっかり日常の当たり前前と感ぜられる程には同棲生活が板についたということだろうか？

狭くて窮屈だったベッドも、あれから未だに買い替えてはいない。一度、栞那と量販店に見に行ったこともあったが、二人で試しに寝てみると、妙にそのベッドの広さが逆に落ち着かなく感じたからだ。

葉那が居なくなってしまうあの寂しさは今でも忘れることは出来ない。朝、目を覚ませば葉那がどこかへ居なくなってしまうかもしれない。恥ずかしいことだが、今でも俺は葉那の身体の暖かさに甘えているのだ。それこそ、小さな子どものように。

朝起きると、同じベッドの中に葉那のぬくもりを感じる。

不安を抱えている時、決まっていっつも葉那は先に目覚めていて、俺を静かに見つめている。そして、子供をあやすように、優しく頭を撫でながらこう小さく囁くのだ。

「ずっと、あなたの傍に居ますよ」

二人で密着して寝られるこの広さが、今の俺たちにはまだ一番心地良いのだと思う。葉那ももうあの頃と違って死神ではなく、ただの普通の女の子。俺たちの間に子供を授かるときも、意外とそう遠い未来ではないのかもしれない。

優しく微笑む葉那と今日もベッドの中で抱きしめ合いながら、ふとそんな確信を心のどこかで感じていた。

——*—*

また一年が終わり、新たな一年を迎えようとする年の瀬。

葉那が勢いよくガシヤア！とカーテンを開くと、外から溢れんばかりの太陽の光が部屋の中に差し込んでくる。

「ま、眩しい…」

燦々とした太陽の光に苦しんでいる俺の身体を、葉那が猛烈に揺らしてくる。早起きはずっかり得意分野な筈なのだが、それでも起きたくない日はあるし、朝一に浴びる眩しい太陽の光はキツイものがある。おはようと眠り眼を擦りつつも、どうしたんだと葉那に聞くと、いつもに増してキラキラとした目で葉那が語りかけてきた。

「昴晴さん、見てください！雪ですよ！」

はしやぐ葉那にせつつかれて外を覗いてみると、確かに外一面に広がる白銀の世界。そういえば、昨日の夜ぐらいから結構な雪が降ると天気予報で言っていたのを思い出した。一面に降り積もった白い雪が、朝日の光を反射してとても神秘的な光景を醸し出している。

ボケつと外を眺めていた俺の隣で、葉那が仁王立ちで宣言する。

「これから我々は重要な任務を行います」

ふんす、と手を腰に当ててドヤ顔で居る葉那のスカートをひらりと捲つてやる。

「…ふむ。今日は黒か。似合ってるぞ葉那」

「え？あ、ちよ…なんで突然スカート捲り出すんですか!?変態ですよ!いや、変態なのも知ってはいるんですけども!」

「そんなの…葉那が可愛いからに決まってるじゃないか!」

自信満々にグツとサムズアップしてやる。

「そうじゃないです!…ま、まあ?少しは嬉しいですけど…いや、嬉しくない!」

「でも内心はちよつと喜んでるんでしょ？」

「…」

「…何故目を逸した？」

無言で脳天にツンとチョップ。

つまり、そういうことだ。

コホン、と。

わざとらしく咳をすると、改めて誇らしげに葉那が言った。

どうやらここまでの流れをなかつたことにするらしい。

「ズバリ、雪だるまです」

「雪だるま？」

「はい。雪だるまを作りに行きましょう」

そう言われて、ふと外を見る。そこには広がる一面の銀世界。

——絶対に寒い。

「こんなに寒いのに?」

「はい。寒いのに」

念の為、もう一度外を見てみる。

うん、何度見ても寒そうだ。

「雪だるまを作りに?」

「はい。雪だるまを作りに」

「:ちなみに拒否権は?」

「拒否権を行使した場合、その:暫くの間えちなことは禁止します」

「:でも最近はどこらかというと栞那のほうからが」

多いような。そう言おうとしたが、栞那がその先は言わせんとばかりに続きを遮る。

「なにか、言いましたか？」

「いえ、何も」

最近、栞那の尻に敷かれ始めて無いかなど。心の片隅で少しばかり感じた。

——*—*

「これはまた…」

「こっちの方も結構降ったみたいですね」

せつかくですから、SNS映えも狙って喫茶店前で作りませんか？と。そんな栞那の提案で、二人は喫茶ステラまでやってきた。店の前に着くと、最初に目に入ったのはすっかり雪化粧をして白く染まった喫茶ステラの姿。これはこれでSNS映えしそうな写真が撮れそうだ。

積もった雪の量からして流石に大きいサイズは難しいだろうが、小さいサイズのもの

であれば幾らでも作るには問題はなさそうだ。

早速、二人で隣同士に雪をこね回す。

太陽が照つているとは言え、季節は真冬。こういう寒い日はこたつで丸くなってぬくぬく過ごしたい。そう言うと、栞那はそれも良いですね、と小さく笑った。

「でも、せっかく雪が降ったんですから、体を動かして楽しまないと損じゃありませんか？」

「昨日の夜もたくさん運動してお楽しみじゃなかったでしたっけ」

「…昂晴さんって、相変わらず本当に凄くデリカシーに欠けてますよね」

ジト目でそう非難されてはぐうの音も出ない。実際その通りなのだから何の反論も出来ないのが若干悔しいのだが。

「えっちなこともまあ…嫌いではないですけど…。好きな人とこうして季節を一緒に楽しむっていうのは、我儘なことなんでしょうか？」

もじもじと、どこか恥ずかしそうにそう小さく打ち明けてくる葉那。

「愛してるぞ、葉那」

「はい、私も愛していますよ、昂晴さん」

さつきまで外は寒い寒い言つてたはずなのに、この辺りだけ気温がどんどん上がっていつているような気さえした。

——*—*

気がつけば、葉那と同棲し始めてからもう長くなる。

就職してからは、大学と違って葉那と一緒に居られる時間はかなり減った。学生生活のときには無かつた辛いこともたくさんあつたし、実際かなり辛さを感じた時期もあつた。自分自身が選んだ道とはいえ、辛いものは辛かつた。

それでも俺が今まで折れることなく頑張つてこれたのも、これから頑張ろうと思える

理由も、全部栞那が居たからだ。

何気なくこうやって理由をつけて外に連れ出してくれるのも、雪だるまを作りたいか、一緒にいるのが楽しいとか。そういう理由も、嘘偽り無い本当のことだろうが、実は栞那が裏で俺のために色々と気を使ってくれていたりするのを知っている。

辛いときにはいつもなにも言わずとも側に栞那が居てくれた。ただそれだけのことが、無性に嬉しく感じた。この上なく幸せだなと感じた。

いつも隣で笑う栞那を見て、顔が更にゆるゆるに緩んでしまう。

どうやったたら、栞那は喜んでくれるのだろうか。幸せを感じてくれるのだろうか。

気がつけば、そう思うことが日に日に増していくようになった。

仕事の勉強とはまた違う、答えも何も無い”知る”連続の毎日。

俺が、栞那の笑顔を守らなければいけない。

俺が、一生かけて幸せにいかなければいけない。

今までそう思ってきた気持ちが変わってきたのはいつからだろうか。

”俺が”、じゃなく、大切なのは”俺達”なんだと。

一方的な気持ちじゃダメなんだと気がつくことが出来たのも、栞那のお陰。

お互いがお互いのことを見て、感じて、触れているからこそ、毎日違う発見があるし、違う一面を見つけられる。自分が相手を見ているだけでは伝わらないことがある。理解し合えないことがある。だから、相手と真正面から向き合っていくんだと。

それがどんなに些細なことでも、くだらないことだって構わない。
それが出来ることが幸せなんだ。

ただ、当たり前前の日常の中に埋まっただけで、気が付かないだけで、それはこの一面の銀世界のように、キラキラと光り輝いて広がっている。

気がつけば、作ったばかりの雪だるまをそっちのけで、栞那の横顔を覗き見ていた。

「昂晴さん、手が止まっていますよ？なんなら私が手を温めてあげましょうか？身体のだ

の部位で、とはあえて言いませんが。にひ」

白い息を吐きながら、隣で雪だるまを作っていた栞那が俺の手元を見ながらニヤツとした意地の悪い笑みを浮かべながらそう言う。

「栞那が綺麗だなあって、考えてた」

「…珍しく真面目なんですネ。まあ、それはそれで、とても嬉しいですが」

知らずうちにこうやって栞那のことを目で追っている。

栞那のことをもっと知りたい。

栞那の傍にずっと居たい。

最近はずっとそんなことばかり。

どこまでも、栞那のことが好きになってるんだなあと。本当に、この子のことが大好きなんだなって。

「一人で辛いときは、いつでも私が傍に居ます。もう、一人じゃないですよ」

そう言いながら、俺の作った小さな雪だるまの隣に、葉那が自分で作った雪だるまをトンと隣に並べる。

俺の作った雪だるまのほうが少し大きいけれど、出来の良さは葉那のほうが上で。そんな二つの雪だるまを見て、クスクスと二人で笑い合った。

「葉那」

「はい」

「俺、凄く幸せだから」

「私も、とっても幸せですよ。昂晴さん」

どちらからともなくそつとキスをし合う二人を、作つたばかりの小さな雪だるま達が静かに見守っていた。